

# PHD LETTER

## 60

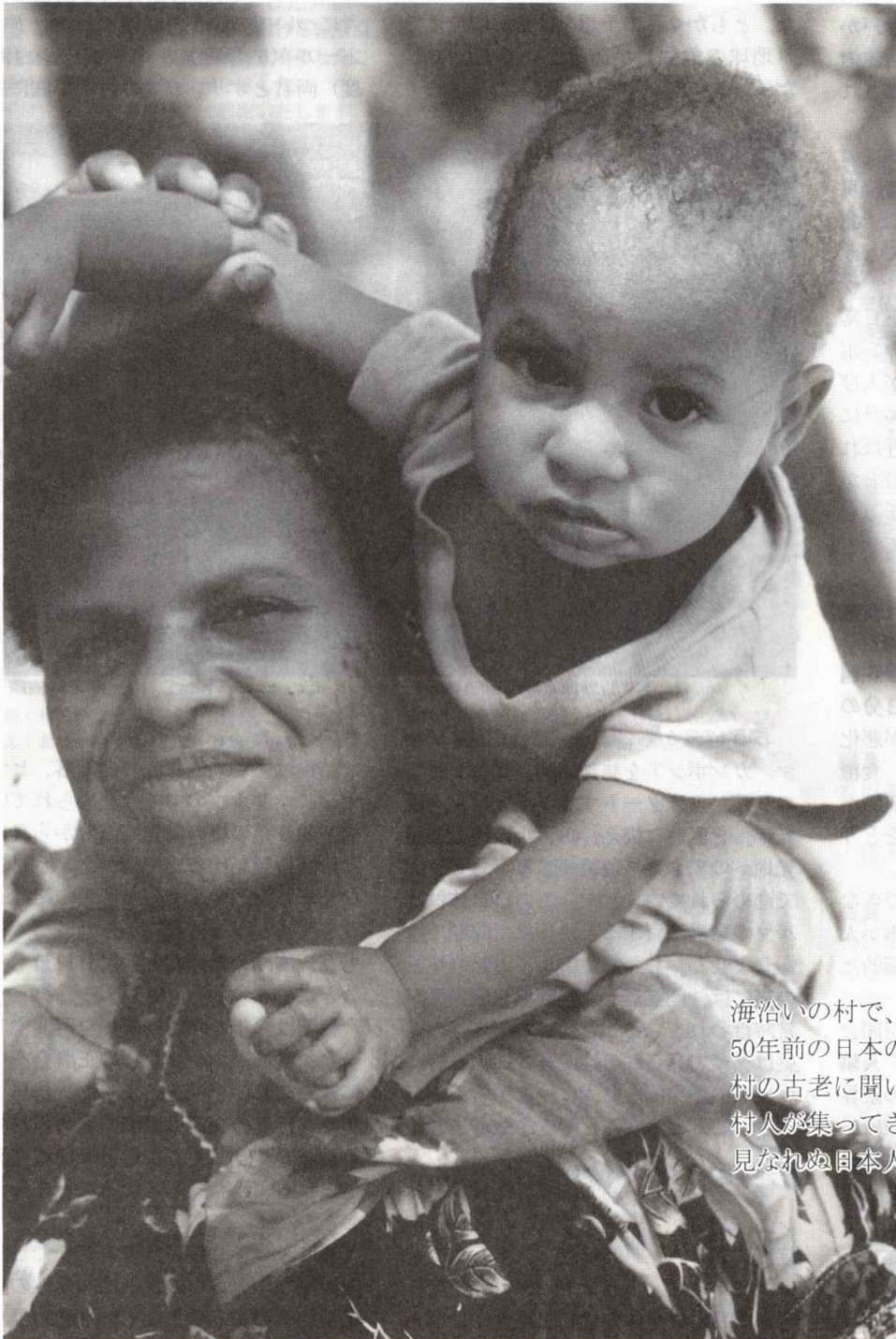
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1996・9

- PNGレポート..... 3 P
- 国際協力ワークショップ参加者報告..... 6 P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
編集人：草地 賢一  
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3  
元町アーバンライフ202  
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867  
定価：100円



海沿いの村で、  
50年前の日本の兵隊が来ていた話を  
村の古老に聞いていると、  
村人が集ってきた。  
見なれぬ日本人に、子どもも興味しんしん。

ババア・ニューギニア、モロベ州フィンシャーフェン

# NGOの役割は有機肥料のように...

5月28日から6月15日までトルコ、イスタンブールで開催された第2回国連人間居住会議に出席しました。いわゆるHABITAT IIと呼ばれる今世紀最後の国連会議です。

世界各地のNGO、地方政府、議員などが各アクターごとにフォーラムを持ち6月4日からは政府間会議が開かれました。日本のNGOは約80名の参加者を送り、その内約40名は大震災被災地神戸から出かけました。それだけ人間の居住の問題が基本的人権として切実に意識されていたからです。

主要なテーマは二つ。第一はすべての人びとに適切なすまいを、第二は持続可能な社会経済発展ということでした。会議の焦点は「居住権」を人権としてどう確認するかにありました。

ビルマでは政府による強制退去が日常茶飯事として行なわれています。カンボジアには1千万発といわれる地雷が人びとの居住を不安にしています。マニラには有名なスモーカーマウンテンと呼ばれるゴミの山の中に数万の貧しい人びとが住んでいます。ソウルの人口は2千万を越え韓国全人口の約半数が集まっていますと言われます。

このような環境の中で人間の居住(すまいとくらし)をどう基本的な権利としてとらえるかということは、大きな課題です。21世紀に入ると世界人口の3分の2が都市に住み、すまいとくらしが悪化すると同時に農村の崩壊はすすみ、食糧の生産が減少し、ますます貧困と飢餓が拡大すると言われています。これをどう克服するかが話し合われたのです。

結論は必ずしも満足することのできないものでした。特にアメリカと日本が人権としての居住権を認めるのに消極的だったからです。

私は政府代表団の一員として政府間会議に参加し、「国益」を背景に「人類益」、「地球益」を協議する国連の限界を痛切に感じました。一方でそれ故にこそこの会議の準備委員会がCBO(Community Based Organization 住民組織)、NGO、学会、地方政府、議員などを対等なパートナーとして参画させたことに希望を見出し出そうとしていることがよく分かりました。特に今回の会議における女性のコミットメントは目を見張るものがありました。

被災地の代表として私が政府代表団の中で努力したのは行動計画(アジェンダ)の中にその教訓(例えば仮設住宅をでき

るだけ前の居住地に近いところを作ることなど)を活かした文言を付加することでした。不十分ながらいくらか目的を達成することができました。

この会議での率直な感想は「地球規模の問題」とくに環境保全、核、都市化、食糧、人権などが非常に危機的状況の中にあり、必死にこれを解決しようとする人びとがたくさんいるということでした。ともかく私の予想をはるかに越えて「地球の危機」があるということでした。



ネグロス島オリガオ村のデイケアセンターにて、ネストール君(左)、ドミナドール君(右)と共に。

6月17日から28日まで駆け足でビルマ、カンボジアを訪ね帰国。ビルマはこの9月からスタートする「ミャンマー観光年」を直前に控え、ホテルの建設、観光地へのアクセス道路の工事が急ピッチで進められていました。この事自体はビルマの発展に資するという点で問題ではありません。しかしホテル、道路の建設の裏には強制立退き、強制無報酬労働が常時行われていること、また観光年の隆盛はタイで見られる性産業の拡大、特にエイズの爆発的な拡大につながる不安が大きいことを考えると素直に歓迎できるとはいえないのです。

マンダレーから約20km離れた村タインシエでは、帰国したウィン(92年度)、ムーム(93年度)、トゥンティン(93年度)、トゥントウン(94年度)さんたちが村全体の強制立退きにおびえながらも村づくりに励んでいました。一昨年の訪問の時に、マンダレーのニュータウンが村に12kmまで迫っていると言っていたのが今年は4km地点まで拡大しているとのことでした。

# 草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

カンボジアもブノンペンの野宿者は増加してきており併せて政治の不安定化が進んでいます。このような中、帰国直後のチル・カエウさんが希望をもって農村の特に女性のエンパワーメント(力を培うこと)に頑張っていました。

3週間後にフィリピン、韓国のフォローアップに出かけました。フィリピンはこの3年懸案になっている研修生の選考についての調整が課題でした。ドミナドール(89年度)、ネストール(90年度)両君とオリガオの村で率直に話し

合いました。

結論は両君の住む二つの部落、ヒナワヤン、マリカウの中で今進められている文字通り草の根の最先端部分から具体的な研修希望が出るまで待つということになりました。今までの上からの組織づくりを反省し本当に足元から地域づくりをもう一度始めた両君と共にPHDも歩むことにします。

韓国は今年から短期研修を再開するに当り、洪城(ホンソン)の正農会を中心に絞ることの協議をしました。居昌(コチャン)との交流は洪城で進められている地域づくりを中心に地道な地域交流が生まれるよう希望していることを伝えました。

私にとって2年ぶりのアジアでした。国際協力のNGOの役割は即効性の高い化学肥料のようにでなく、堆肥のような有機肥料でなければならぬことを改めて教えられ帰国しました。

総主事 草地 賢一

97年度の研修生の選考と過去招いた5人の研修生のその後を調査するため、そして2回目となるスタディツアーを兼ねて2年ぶりにパプア・ニューギニア(以下PNG)にでかけました。

PNGにおける協力団体はLutheran Development Service(LDS ルーテル教会開発奉仕部)。まずPNG第二の都市レイの事務所で94年度短期生ペノさん、代表のフアさんに今回の目的を説明。翌日から船でフィンシャーフェンに入り、90年度研修生ヘルペさん、レルさんの迎えをうけました。もう一人91年度研修生ラニーさんはこの時少し体調を崩し、村の病院に入院中でした。

今回の選考はLDSの中にあるYangpela Didiman(以下YD)と呼ばれる農業振興部門が実施している農業研修コースの卒業生が3人候補者として挙がっていました。このコースはヘルペさんが指導を担当、いわば自分の弟子を推薦してきた形となりました。3人の候補者はそれぞれ村で農業を営んでいます。今回滞在したヘルスバックにある建物の一室で3人を前にPHDと研修内容の説明をし、次に質問表に各自記入。それをもとに個別の面談、さらに3人揃っての集団面接を行いました。いずれも好印象を持

PNG PNG PNG PNG PNG PNG PNG PNG

石垣 信也(鹿児島県高尾野町・農業)

私達が訪ねたフィオ村の様子は、伝統的な家屋に、ヤシ、マンゴーなどの高木、バナナの下に常食のタロイモ、サツマイモ、アイビカ(野菜)、サトウキビを混植。点在する狭い焼畑は、土地がもったいないと思えそうだが、日本の減反田の写真と説明に、逆に信じられないとの答え。採りすぎない、作りすぎない。考えてみれば実に合理的。むろん機械などない。農産物は山道を3時間も歩いて売りに行く。収入は決して多くはないが、かといって買う物もそうない。日本よりもきれいに整った村や、のんびりと実に安定した暮らしぶりに驚き、感心し、そして我が身を少し反省した。

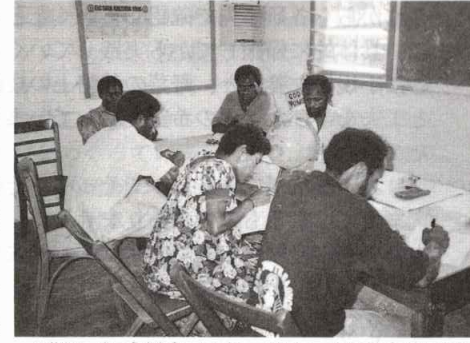
亀井 テル子(福岡市・小学校教員)

PNGの子ども達は実にシャイだ。村に泊まった日の夕食の時、いっしょに食べようと近くまで行ったが、恥ずかしそうに立っているだけだった。やっと一人の子が手を出した。"Nice to meet you"と言って握手をした。すると、他の子ども達も少しずつやって来た。

日本の小学校で使うたて笛で『上を向いて歩こう』等吹いたが、興味を持って

りましたが私と推薦側との協議の結果、ハリエオさん(38才・男性)を第一候補とし、ワニさん(36才・男性)を第二、ゲオリさん(29才・女性)を第三とし、97年、98年で招きたいと伝えました。

選考の翌日はハリエオさんの村を訪ねし、どんな環境で生活しているかを見て



選考風景。むこう右からヘルペさん、レルさん、手前右からハリエオさん、ゲオリさん、ワニさん。

ました。ヘルスバックから車で山道を1時間程入ったピランコという人口3百人の小さな村です。広いフィンシャーフェンの中でここは比較的便利のいい村です。ワニさんやゲオリさんの村はヘルスバックから車で1日さらに歩いて1日かかります。ほとんどがジャングルで、道路が十分でないため、移動や物の運搬には困難を伴う地域です。自給自足に近

# PNGレポート

聞いてくれたのでうれしかった。

子ども達がいつも遊んでいるというゲームをした。なぜか私が鬼になったが、どこの国の子どもも逃げ足は速い。

少しの間、過ごした所なのに、心が豊かになったような気がするのなぜだろうか。

足立 真司(大阪府箕面市・大学生)

フィオの村は、みんなフレンドリーな方たちばかりで、アットホームな雰囲気でした。その人柄が表すように、村もそのような雰囲気に満ちており、自然と一体化したとても素晴らしい村でした。

当初、私はPNGの村と聞き、いくつかの家がそこにあるだけのものだと思っていましたが、訪ねた村は、家はもちろん、学校や教会、魚の養殖用の池、ゲストハウスなどの施設があり、また学校教育は6歳から始まり、語学の勉強も行われています。これらは村のほんの一部の側面ですが、村規模でのその施設や設備制度の充実ぶりには、目を惹かれるものがあり、大変驚かされました。

篠原 登子(神戸市)

ずんぐりむっくりした体型のおじさん

い形態からの変化が始まっているPNGの農業にヒントとなる研修を用意したいと思います。

帰国研修生それぞれについては、ラニーさんはワンドカイ村で洋裁教室を継続し、あわせて保健衛生についても、洋裁の合間に村の女性に伝えています。ヘルペさんはYDの職員として農業全般の指導を行っています。レルさんはワリンガイ村で農業を続けています。いろいろなアイデアを自身の畑で展開中ですが、目下のところ乾期の水の供給が大きな課題となっています。川から水を汲み上げるポンプとその発電機が欲しいと言っていました。近々政府による農民に対する小口融資の計画があり、実現されれば、LDSからもレルさんを推薦したいとのことでした。89年度生のトニーさんはシンプー州の仕事を終え、現在はレイの事務所に籍をおき、移動学校(Mobile training)を担当しています。ペノさんも同じ事務所で元気にやっていました。

スタディツアーは日本からの4人の参加者に加え青年海外協力隊で現地に赴任中の児島君も合流し、人選から村での滞在まで貴重な体験をしました。各人の報告をご覧ください。

藤野 達也

PNG PNG PNG PNG PNG PNG PNG PNG

たちと手足の長い若者たち。日本とほぼ変わらない物価の貨幣経済と自給自足の村の生活。人なつこいに恥ずかしがりやの一般の人々と日没後の外出を不可能にしているラスカルと呼ばれる凶悪犯たち——。「開発」「企業」「援助」

「協力」など様々の仮面をかぶった外国の文化、思想が急速に広まりつつあるP



村を巡るうち出会った老人から日本兵の話を聞くツアーマンバー。むこうの用水タンクは日本政府の支援で作られたという。

NGとはこのように全てが二極分化された世界であった。

伝統的な血族間の強い結びつきに守られ絶対的な貧困が存在しない国。そこへ近代化が浸透したとき、このパラダイスに一体どんな変化がもたらされるのだろうか。

# 14期生

出国手続きが遅れていたビルマのカイン・ソーさんも7月24日に無事来日し、ようやく第14期生4名が揃いました。インドネシアのウピさんは、女性の研修生が来たことで大喜び。研修の合間に神戸に帰っている時は、結構上手になった日本語でカインさんの日本語研修のお手伝いもしています。

**ミノさん (フィリピン)**  
牛尾武博氏 (兵庫・市川町) ~ 吉田吉彦氏 (兵庫・氷上町) ~ ふえろう村 (小野市) ~ 中野宗嗣氏 (兵庫・春日町) ~ 「草の根生活塾」 (兵庫・篠山町ほか) ~ 笹間政典氏 (鳥取・日野町)

根っからのお百姓さんのミノさんは、日本での農業研修の中で、できる限りの技術改善の方法について学びたいとの意欲を持って研修に臨んでいます。相変わらず無



中野さんのお宅で牛の世話、牛フンの堆肥が勉強になりました。

口でシャイなところはありますが、研修で実際に堆肥を作り、鶏糞を畑に入れていくなどといった作業の中で、ゆっくりと確認するように学んでいる様子です。けれども、日本語で質問したり、説明を聞いたりすることがまだ難しいところがあり、もう少し積極的に話していくことも必要でしょう。

先日ミノさんと研修内容、希望について話し合いを持ちました。フィリピンの村では、ミノさんが所属する団体、農民グループが中心となって、有機農業に取り組んでいます。仲間を増やすことは難しいようですが、ミノさんは堆肥を積極的に使い肥沃な土をつくらうとしています。

その上で、有機農業全体の技術、経営を

これからも各研修先で確認していくとともに、具体的に帰国してから実践していくために小規模な養鶏と、野菜の栽培上の技術と工夫を学びたいとの希望を話していました。

日本の農法がフィリピンでそっくりそのまま当てはまるものではありませんが、日本の農家の経験から多くのヒント、工夫を学んでほしいと思っています。

**ウピさん (インドネシア)**  
太陽保育園/西村礼治氏・岸政次郎氏 (兵庫・八鹿町) ~ 尾崎食品株式会社 (神戸市西区) ~ 兵庫県三木保健所・三木市健康課/広瀬国重氏・阿南徹氏・辻村矩子氏 (兵庫・三木市) ~ 「草の根生活塾」 (兵庫・篠山町ほか) ~ 波賀みどり保育所/田中五郎氏・柴原幸代氏 (兵庫・波賀町) ~ 兵庫県高砂保健所・高砂市保健センター/船田昭信氏 (高砂市)

来日当初からずっと賑やかなウピさんが現在学んでいるのは、保健衛生です。アイルバングス村から2人目の女性研修生として、既に帰国しているラッドさん(第13期生)ともいろいろ話し合ってきたようです。

ウピさんの希望が栄養を中心としたものであったために、三木市での研修では栄養素とその食品分類を中心に研修を行いました。栄養改善を考える上で、まず基本となることですが、これも農業と同じように気候、風土が全く異なる所では、まず身近なところで用意できる食料の中から考えていくような工夫が必要になってきます。ウピさんもその点は十分把握した上で、研修に臨んでいます。

保健という分野は、農業と異なり目に見える技術上のものは少なく、知識上の研修を多く要求されます。そのための専門用語も難しいのですが、ウピさんは辞書を片手



研修先でもいつも明るいウピさん。(八鹿町太陽保育園にて)

に、がんばっています。これからは、手芸、パッチワークも研修に取り入れていこうとウピさんと話しています。



一色さん宅で有機農法による野菜づくりを学ぶ。

**ビドウルさん (ネパール)**  
一色作郎氏 (兵庫・市島町) ~ 橋本慎司氏 (兵庫・市島町) ~ ふえろう村 (小野市) ~ 山口勝弘氏 (兵庫・南淡町) ~ 渡辺省吾氏 (兵庫・丹南町) ~ 「草の根生活塾」 (兵庫・篠山町ほか)

これまでいくつかの農家を訪ね、有機農業を中心とした研修を行ってきました。中でも、有機農法による果樹栽培に取り組んでいる山口さんのお宅での研修は、ネパールでも実践可能な技術的などところを学ぶことができ充実したものとすることができました。

山口さんはこれまでも研修生を受け入れてくださっている方ですが、いつも研修とともに、交流を大切に考えてくださっています。今回のビドウルさんの滞在中も、地元の灘小学校で子どもたちとの交流の機会を持ってくださいました。

ビドウルさんは、ネパールで村人に指導していく仕事をしていたためか、ネパールの生活、文化の紹介をすることはとても上手です。子どもたちからの質問にも上手に答えていました。

農業だけでなくNGOの運営にも関心を持つ彼は、PHD協会の活動から会計、広報、事務手続きなども学んでいます。

# 研 修 生 レ ポ ー ト

**カイン・ソーさん (ビルマ)**  
神戸YMCA学院専門学校/中馬美恵子氏 (神戸市中央区)

出国許可が急におりたとの情報をビルマからもらい、慌ただししい来日となりました。現在は、神戸YMCAでの日本語研修の真っ最中です。

カインさんは、これまでの研修生からかなり日本語を学んでいたようで、これはYMCAの先生方もびっくり。あいさつはもちろん、既にひらがなは読むことができていました。

カインさんに聞いたところ、ビルマでの

日本語の先生はムームーさん(11期生)とトゥントゥン(12期生)だそうです。

カインさんは、村では足踏みミシンを使いこなし、服やロンジー(ビルマの伝統衣装)をつくっていました。これはこの村のグループ活動のひとつで、服を買うことができない村人に布地だけは用意してもらい縫ってあげています。

男性用の冬物の上着を作ることができるようになりたいとのこと。

日本での研修テーマも、保健のひとつ通りの知識とともに、洋裁の技術を更に向上させたいと意欲を見せています。



来日後、大阪外大ビルマ語科の川口さん(右)の通訳でオリエンテーション。

# 帰 国 研 修 生 短 信

ビルマ

**ティン アン ウィンさん (92年度)**  
村に滞在13年目、最近では3人の研修終了者が進める信用貸付、移動図書館、リーダーシップ研修の助言役に徹す。強制退去に備え移動先の村づくりなども研究中。

**ムー ムーさん (93年度)**  
地道に村の保育所で幼児の健康づくり、衛生、栄養思想の普及に努めている。他にタダインシェと近くの村の洋裁グループへの指導も行う。夫の小学校長と保育所の質素な教員室に寝泊まり。

**トゥン ティンさん (93年度)**  
米作りに大きな関心を持ち研究中。来日前の92年の収量1090kgから95年は1635kgに伸ばし、96年は1744kgをめざす。他に乳牛の飼育を始め7頭と耕作牛2頭。堆肥生産量は現在年間10トン。

**トゥン トゥンさん (94年度)**  
帰国後マングレー大学へ入学。但し長く政情不安で閉鎖されていたため複式授業、さらに一年を4ヵ月で終了する短期促成。あとは兄、父と共同で野菜(玉葱)果樹(マンゴー)に取り組む。

フィリピン ネグロス

**ドミナドール・ヒロゴさん (89年度)**  
帰国後ネグロス農業大学で2年間林業の勉強の後、教会の農業指導者として活躍。最近では彼の地元ヒナワヤン地区で草の根からの地域づくりに取り組む。

**ネストール・セルバンドさん (90年度)**  
地元マリカウの中で地道に地域づくりに励む。村人の努力で幼稚園が開園。妻のエベリンが無償の保母。植林、棚田の開墾に精を出し、ふえろう村のような共同体づくりを夢見ている。



左から、自分の畑について説明するトゥン ティンさん、一人おいてトゥン トゥンさん、ティン アン ウィンさん



夫とムームーさん

前号でも触れましたが、5、6月に行った「入門・国際協力ワークショップ」について、参加者からの報告です。

思えば、国際理解も国際協力も相手あってのことです。「南北問題」（ハイ、赤線をひいて下さい）、「国際協力」（日本の役割が

の国々から集めた上に成り立っていることと、これが地球環境問題の原因の一つとなっていることを、みんなが理解する必要があるからです。ライフスタイルの見直しと言われても、視野を国内だけに

### ワークショップ参加者報告

石川 照子 (神戸市・高校教員)
国際理解・国際協力について学ぶとき、共感や体験が不可欠と感じながらも、どうして良いか思いつかず、結局、説明→板書→試験を繰り返して

期待されています)といった一方通行の知識では、試験終了とともに忘れ去られていくのがオチです。授業で学んだことが、生きた知識であり続け、生徒の血となり肉となり、そして行動となるために、今回私が体験したゲームを授業でどう使っていくかと、あれこれ考えている夏休みです。



異文化体験ゲーム「トット」に夢中(?)の参加者

藤川 隆一郎 (神戸市・公務員)
私はここ数年環境教育の仕事をしてきましたが、環境教育と国際理解教育や開発教育とが不可分の分野であると確信するようになってきました。それは、今日の日本の豊さが、大きな経済力により多くの食料や資源を世界

で、早速応募した次第です。

さて、私は一応皆勤賞をいただきましたが、若い人達と違ってどれだけ自分の殻を破って参加できたでしょうか。でも全てが初めてのプログラムで勉強になりました。

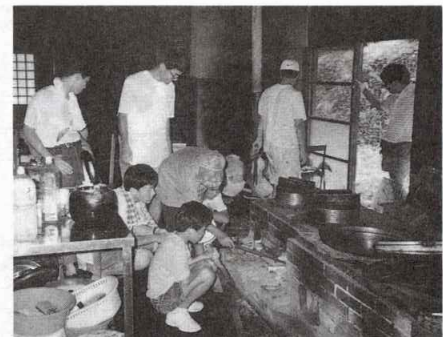
全体を通じての感想は、意思疎通の難しさ、コミュニケーションの不確かさ、そして価値観の相違を越えて相互理解することの困難さを知ったことです。参加型のプログラムを通じ、様々な意見を聞き、自らも述べて有意義だったと思います。もう少し話し合いの時間が長ければと思いました。

特に印象的だったのは、異文化体験のロールプレイとチョコレートをめぐるシミュレーションでした。自国の常識が、他国では常識ではないこと。経済的価値が、社会的にも個人的にも優先してしまうという実感。この二つのプログラムだけでも数回の討議の場がほしくいでした。

私は今、近所の子供達とエコクラブというグループを作って、環境学習をしています。今回の研修を参考に子供達と世界のことを考えてみようと思っています。

お年寄りのために「柔らかなシゴレン」を作ったことにしておく。子どものペロは正直だ。大量に残る。ノラ犬ゴロちゃんにあげる。ゴロちゃんは一口も食べない。犬のペロも正直だ。

――研修生の国のことを話を聞くだけでなく、食べて感じてほしくて考えたメニューだったけど・・・。



「たんば農文塾」のキッチン、火をおこすのみみんなで行いました。

(中略) やっと、4日間のメシ作りが終わった。りょうりは楽しい。でも、もうちょっと練習してからやろう。

――かまどでご飯を炊くのも、マキの火で料理するのも初めてという人ばかり。そんな中で4日間で、まずはスタッフに子どもたち以上に「アジア」や「食」を感じてもらえたのでは・・・と思います。

### 「第11回草の根生活塾」

8月1日～4日

アジアの研修生との交流、農業体験、たんば農文塾での生活体験と毎年盛りだくさんの内容の草の根生活塾。今年も、多くの方々のご協力のもと実施することができました。4日間、子どもたちも自然の中で存分に羽をのばしていましたが、ここでは料理担当として参加者24名の胃袋を支えたボランティアスタッフの報告を紹介しします。



楽しい毎日をすごした「たんば農文塾」

「りょうり」 古山 裕基
りょうりは楽しい(と思う)。でも、おいしいかわからない。

一日目はカレー。エジキになったのは2羽のにわとり。「〇×ちゃんと〇〇ちゃん」と名前をつける子どもたち。しかし無情にも首を落とされるにわとり達。毛をむしられ、つ

るっパゲにされる。いよいよ腹がさかれる。さわぐ子どもたちとちもととさわぐ僕たち。肉を切るのに大汗をかき、固いのだ。いよいよ「ネパールカレー」ができた。骨か肉か区別がつかないぐらい食べても固かった。

翌朝5時。生き残りのにわとり1羽をさばかなければならない。名前は知らない。誰がさばくかで昨晚もめる。朝からこの作業はかなりキツイ。一応「フィリピン風とりぞうすい」ができた。

昼。インドネシア風やきめしナシゴレンを作った。

地元のお年寄りが来られる。子どもたちにわら細工、竹細工を教えてくれる。米がええ感じで炊きあがった。しかし、冷やご飯で作る焼きめしと同じように考えて、米を水洗いしようとして水をいれたらおかゆのようになってしまった。ゴメンなさい。水入れたのはボクです。「これはナシゴレンじゃないわ」とウビさん。

## PHD NEWS

### ＜会費・ご寄附寄託状況＞

1996年 5月	98件	1,561,017円
6月	146件	2,178,820円
7月	655件	4,332,313円
899件	8,072,150円	

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

### ＜外務大臣表彰を受けました＞

去る7月10日、東京で、地域における国際協力の推進と、諸外国との友好親善に寄与したことに対し、表記表彰をいただきました。皆様のこれまでのご協力に感謝いたします。

### ＜あなたも参加しませんか？タイへの旅＞

冬はタイへの旅。すっかりおなじみとなり、人気の高い北タイ、カレンの村へのスタディツアー。今回はチェンマイ県とメーホンソン県を訪ねます。プリチャーさん、ウィラトさん、コマさんに会いにいきましょう。

日程：12月23日～97年1月2日(10泊11日)
定員：13人
参加費：約19万円
詳しい案内を用意します。お問い合わせ下さい。

### ＜東日本研修旅行＞

アジアの草の根の青年たちから村の生活、文化等を学ぶため、また、彼らにとっては、社会見学とリーダーシップ養成の場となる東日本研修旅行。今年もたくさんの人たちとの出会いを願ってご案内します。交流ご希望の方、お問い合わせ下さい。なお、コースの近隣の方には改めてご案内します。

時期：11月中旬～下旬
コース：北陸～甲信越～関東～東海(予定)

### ＜募金箱でご協力を！＞

職場やお店などが集まるところにPHDの募金箱をおいて下さいませんか。アクリル製の大、小と用意しています。お問い合わせ下さい。

### ＜新作絵ハガキをよろしく！＞

アジアのいきいきとした表情をとらえて好評のPHD絵ハガキ。久しぶりの新作ができあがります。今回は写真だけでなく、書、漫画イラストで4枚1組、300円。年末年始のごあいさつにもどうぞ。



### ＜ワンワールド・フェスティバル＞

10月6日は国際協力の日。国際協力のまつり、ワンワールドフェスティバルも今年で4回目を迎えます。、民俗芸能、パネルトーク、第三世界ショップ、エスニックフード、パネル展など出し物は盛りだくさん。PHDもバザーや料理のブースの出店を予定しています。気持ちのよい秋の一日を楽しく過ごしてみませんか。当日のお手伝いも大歓迎です。

日時：10月20日(日) 10～16時
場所：大阪・鶴見緑地(地下鉄 鶴見緑地線終点)
入場無料・雨天決行

移すのかどうするのかとか、このごろちよくちよく混じって入ってくる草木染め以外の化学染料の布をどうするのかとか、意見が交わされています。

結局、言葉の厚い壁もあり、ムシキートとのつながりを減らしていかざるをえないということ、布については、ソディの一番大切にしたい伝統的な草木染めの布を中心に、化学染料も既に日常で人々の生活に深く入り込んでいるという現実もふまえて、化学染料の布もある程度認める、ということに落ち着きました。

また今後、ソディも布を売るだけでなく、活動内容を伝えていく意味も含めて、ソディで活動している人も初めて布と出会う人も楽しめるイベントも企画しようかという声も上がっています。

興味ある人はぜひ遊びに来て下さい。ソディは今、過渡期なのです!!

古橋 理絵



### ＜このごろのミーティングは……＞

ソディが、タイのカレンの人と布を通して交流を始めてかれこれ7年目。

ソディは今、過渡期です！ と言うのは今でもソディと深い関わりのあるプリチャーさんがムシキー村からメーホンソン県メサリアンの村メラノイに移るからです。PHDの研修生で日本語のできる、これまでムシキーのグループとのつなぎ役であった彼が移るということで、ソディも布を購入する先をメサリアンに

### ＜第10回関西NGO大学、開講＞

10期目をむかえたNGO大学。今年も9月から毎月1回1泊2日の6回で行われます。今期のテーマは「生活に根ざした開発と協力」。今期も当協会の藤野が校長を務めます。定員50人。詳しくは下記へ。

### 関西NGO大学事務局

〒550 大阪市西区土佐堀1-5-6 大阪YMCA内
電話 06-441-5598

- 第1回 「私はどこにいる？」 9月21・22日 発題者 中村尚司、福田紀子
- 第2回 「こんなこと、あんなこと、そんなこと」10月26・27日 発題者 地方自治体、企業、NGO、マスコミから
- 第3回 「多文化・異文化・美しいやんか！」11月16・17日 発題者 ソル・アンソニー・スバム 田村太郎

### ＜使用済テレホンカードを送って下さい＞

テレホンカードの変造を防止するためNTTがボランティア団体等を対象に使用済テレホンカードを引き取り、回収協力を支払う制度を実施しています(個人、企業等には回収協力金は支払われません)。
当会活動をご支援いただくため、使用済テレホンカード回収にご協力を!

## 〇月×日のPHD協会

職員 草地 連日移動の韓国、フィリピン出張。日程に体がついていかず、トシを自覚とか。次からは敬老日程を要求。

職員 谷 夏の大イベント草の根生活塾を担当。体力を要する泊り込みプログラムで他の職員を押し、前号に続き再び若さをアピール。

職員 藤野 夏の3本のスタディツアーを引率。PNGにはマラリアを気にしつつつでかけるも、日本のO-157の方がずっと怖かったりして。

職員 小松 前号でご案内のTシャツが大ヒット、目下400枚突破。希望通り忙しくなって良かった、良かった。続くは新作絵ハガキ、もっと忙しくさせて。

職員 吉岡 地震でガタがきていたアパートがいよいよダメで、銭湯通いとともにも新居探し。震災は未だ終わらずを感じさせる。

職員 渡辺 家庭で犬を飼いはじめ、主に糞尿の始末を担当。秋に控えた夫人の出産後に備えてのトレーニングであろうとの周囲の評判。

滋賀県の会員、玉木さん。草の根生活塾に小2の娘さんと参加。初めて出会う職員のひとつとなり完璧につかんでおられ、PHDレターの熟読ぶりに職員感激。



## 編 集 後 記

運命の赤い糸に引き寄せられてPHDの敷居をまたいで早5日。スタディツアーのレポートをレター用にワープロしたり、活動に興味を持ち連絡して下さった学校へ送る資料の準備等のお手伝いや足手まといをしています。少し変わった職員の方々と海外研修生達が生

み出す不思議な空間の事務所にはお客様も多く、(事務所をあけているのは職員さんにとっては当然、仕事になるわけですが)「仕事じゃないですか?」と言って遠慮がちに入ってくる方も。

昨日も、会員の方がお友達と来所され、居合わせたネパールからの研修生ビドゥルさんと和やかに質疑応答を始められました。時には、「彼女いるんでしょう」という鋭い質問も出ていました。

私は募金をしたことがありません。それは、何に使われているのか、本当に必要としている

人に、最適だと思われる方法で役に立っているのか疑問だったからです。この場面を見て、募金や寄附は、して終わりなのではなくて、きっかけであり、そこが疑問の解決の始まりなんだなと思いました。

皆さんも来所されて、ご自分の会費が、どんな人のどんな目的のために使われているのかを、直接確認してみたいかがですか(昼寝でも待ち合わせでもOKとのことですから)。

み

編集メンバー

大下美賀子、田中利佳、中野順子、松本緑、山口有香

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。